れており、調査上その比較に不便であったのでその基準となるべき「海洋気象観測法」を本年編さんして刊行した。同観測法の第8章の雑象の中には海氷の項が挿入され、ここに本邦ではじめての海氷に関する船舶用の観測基準が制定された。

同法では、「海氷を認めたるときは、その日次時刻を 記し、氷量の多少、氷結の模様、漂流する方向などを詳 細に記しおかれたし」とあり、海氷の種類としてつぎに 示すものが列記されている。

- 1. 氷山 (Ice berg)
- 2 · 氷堤 (Ice barrier)
- 3. 野氷 (Field ice)
- 4. 逸氷 (Floe ice)
- 5. 陸氷 (Land ice)
- 6 · 錐氷 (Hummocky ice)
- 7. 群氷 (Pack ice)
- 8. 泛氷 (Drift ice)

また同合制定の海上気象報告用紙が一般船舶に配布され、海氷を観測した場合には上記の諸項を記事欄に記入して海洋気象台に送付することとなった。

大正 11年(1922)海軍水路部委託の観測がはじめ られた

本年海軍水路部では前記の観測法に準じて「海洋気象観

測心得」を制定し、部內艦船と一般商船に対して洋上で海水に遭遇した場合にはその詳細を観測して同部に報告することを委託した。これより北太平洋海域に行動する艦船から観測資料が送られ、同年から水路部で発刊した水路要報に「水路報告」として收録されるようになった。(未完)

(1955. 1. 14 函館海洋気象台調査課)



写真 4 氷 岩 (Growlers) 根室湾沿岸

野付水道を南下し湾内に定着した流氷野が沖合に去った 後に残されたもの。浅瀨にのり上げ大部分を海面上に露 出している。[定着氷]

(1953. 2. 10 根室測候所撮影)

書評

The Physics of the Stratosphere
—Cambridge Monographs on Physics—
R. M. Goody 著

成層圏の物理に関する著書はこれまでにいろいろ出ているが、この本のように手頃な頁数で始めての人にも容易に成層圏の全貌を与えてくれる本は見当らない.近来、ロケット観測およびゾンデ観測の上昇限の拡大によって成層圏の様相が急速に明らかになって来た。対流圏における気象現象が成層圏の現象と密接に組合されて現われていることが、いろいろな方面で研究されて来ており、大気の熱経済や大気の週期変化を考える時にも、成層圏の果す役割は無視できない.ところが、われわれは普通、成層圏は遙かに遠い高いところにあるという観念から、あるいはトロポポーズが何か壁のような性質のものであるというような幻想から、そして、大気の大部分は対流圏にあるという考えから、成層圏は無視されて来た成層圏についての手近な入門書として、この本の果す役割は大きいと見なければならない.

この本の内容は6章に分れ、第1章序文では成層圏発 見の歴史と成層圏各部の名称 (Chapman その他の人に

よる名称があるが、この著者の名称がより簡単で、相対 位置が明らかである)、使われる測定用具について詳しい 説明がしてあり、第2章は温度について、測定方法とそ れによる測定結果を述べている. 第3章は大気組成, 第 4章では特にオゾンを取あげて論じている。第5章は風 と乱流について述べ、成層圏にも乱流があることを明ら かにしている. 第6章では輻射を取扱い, 最後に"成層 圏の種々の基礎資料 (より正確な組成と温度について の) が成層圏の現象を理解するのに必要であるし、より 細密な方程式の取扱いが、また要請される. そこで、大 気運動の根元がかくして発見することも可能になるだろ ら"とこれらの問題について多くの研究者の努力を期待 して卷を閉じている. 成層圏の諸現象を述べる場合にほ とんど靜的統計的な記述に終っており、われわれになじ みの深いシノプティックな取扱い、あるいは一般気象現 象との関係について述べていないことが欠点で、そのた めに気象家に成層圏についての積極的な関心を呼び起さ ないららみがあるのが残念である。

なお、大気振動に関する事項は同じシリーズの Wilkes 著"Oscillations of the Earth's Atmosphere" (1949) にあるので割愛してある. (奥田)